『秦漢思想史の研究』

町田三郎著

片倉望

〔総論〕

中島敦の小説「名人伝」には、弓の奥義秘伝を会得した紀昌の胸のうちを描写した次のような一節がある。

「彼が其の時独りつくづくと考へるには、今や弓を以て己に敵すべき者は、師の飛衛をおいて外に無い。天下第一の名人となるためには、どうあつても飛衛を除かねばならぬと。」

後世、名人と称されるべき運命を担った人々の歩む道は常に孤独であり、たとえ師に対する並々ならぬ敬愛の念を裡に秘めようとも、さらなる熟達のためにはその師にさえも矢を射掛けるという非情性に耐えねばならない。弓という道具が持つ本来の機能によってこの物語の場合には高度に結晶化された師弟の姿が鮮明にされてはいるものの、この間の事情は恐らくあらゆる分野における第一人者誕生の秘話として普遍性を持つ種類のものであろう。

町田氏の本書が、そのタイトルからして既に恩師金谷治氏の『秦漢思想史研究』を目標にしたものであることは明らかである。秦漢思想研究の奥義秘伝を会得した町田氏が、さらなる飛躍を求めて本書を上梓されたことは想像に難くない。そこで本評では以下、両書を比較しつつ浅学の読後感を書き連ねて行くことを御許し頂きたい。

周知のように金谷治氏の『秦漢思想史研究』は、それまで思想史的にほとんど重視されなかった秦から漢初へかけての時代の思想を闡明し、それによって先秦思想と漢以後の思想との断絶に明確な脈絡を求めようとするものであった。そしてこの金谷氏の研究目的は、その採用した方法の独創性によって実現されている。すなわち、従来、文献批判の成果という名のもとに秦漢の際の附益と断定され、切り捨てられる傾向の強かった先秦の諸書に含まれる不純物を、逆に秦漢期の貴重な資料として積極的に活用し、その附益がなされたことの意味をも含めて思想史的に考察するというのがそれであった。さらにまた、『史記』『漢書』等に記される政治状況と思想資料とを対比しつつ思想の展開を跡付けたという点も見逃すことのできない一面であって、氏の言われる「哲学史学と精神史学との中間領域を占める

もの」としての思想史学とは、正しくこの方法を前提として成立するものであったと推定される。

一方、町田三郎氏の『秦漢思想史の研究』の場合、その研究の目的は金谷氏のそれを空間的、かつ時間的に凌駕することによって、より大規模の秦漢思想史を構築することにあった。従って、その際町田氏の採用した方法は、従来、雑家的性格のために思想研究の中心から外されてきた『呂氏春秋』『管子』、新出の「雲夢秦簡」、東洋史研究の重要資料とされてきた『塩鉄論』、易学の展開という一面のみで扱われることの多かった『太玄経』等の諸書を、思想史の資料として積極的に活用するというものであった。

このような資料拡大の方針が、その拡大された資料の内容を別にすれば金谷氏の方法論を継承するものであることは明らかであり、さらに、『史記』『漢書』等に記される政治状況を、時には個人（例えば楊惲等）の生き様といったレベルにまで立ち入ることによって浮き彫りにしつつ、思想史を組み立てる資料としたという点にも、金谷氏の方法論の継承発展の跡を見出すことが可能であろう。

とは言え、町田氏の方法論上の独創性は、かつて金谷氏が氏の思想史学の立場から、もしくは物理的理由から触れることのなかった資料に対してさえも、その貪欲なまでの探究心を傾けたという事実に求められるのであり、しかもその炯眼誤たざる点は、近年の出土資料によって着々と確認されつつある状況にある。このことはまた、ここ数年来、金谷氏が『管子』の研究に重点を置かれているという事実からも裏づけられるに違いない。

では、このような雄大な構想を持ち、かつ的確な方法論を駆使した本書は、恩師金谷治氏の『秦漢思想史研究』を超え出でる成果を生み出したと言い得るであろうか。私見によれば、この問いに対する答えは必ずしも肯定的ではない。

それは何故か。その第一の理由としては、氏の思想史が、新たに採用した資料に偏重しすぎたという点が挙げられよう。

例えば「第一章　統一への序章」では、荀子、韓非を共に理念的で「現行の政治体制を改革しようとはしない」（三四頁）ものとし、さらに韓非を「本来的に未来への展望を欠如するもの」（三五頁）として退け、一方、「いうなれば諸家の学から創造的立場を追求したものが、実は『管子』であり『呂氏春秋』であった」（四六頁）として『管子』『呂氏春秋』の優位性を主張されている。しかしながら虚心に文献に接するならば、『荀子』の「後王」や『韓非

子』の確立した君権の方が、それらを支える思想的統一性に基づいて遙かに「未来への展望」を与えているように思われ、統一性に欠ける『管子』や『呂氏春秋』に「創造的立場」を見出すことの方がむしろ困難な作業のように思えてならない。もちろん、その点は氏も充分に考慮されているようで、『呂氏春秋』及び『管子』の思想のかなめとしてはその時令思想を指摘されている。とは言え、氏のかなりに苦しい論証が示すように両書のすべてを時令思想によって統一づけることは不可能であり、とりわけ『管子』における時令思想は、それも含まれているという程度以上の意味を持つものではない。もとより評者も『呂氏春秋』及び『管子』の資料的価値を否定するつもりはなく、『管子』が従来あまりに等閑視されすぎる傾向にあったことに対しては恐らく氏と同様の憤懣にも似た感情を有するものではあるが、だからと言ってこの両書を中心に据えて、「次代の秦漢期の特殊性、いわゆるこの期の時代格とでもいうべきもの」(三頁)へと接続させることには同意できない。

このような観点から、黄老思想の成立へと焦点を定め、容肇祖、木村英一両氏の文献批判を前提として『韓非子』の思想に詳細な分析を加えた金谷氏の書の持つ説得力に、結論の当否はともかく評者としては軍配を上げざるを得ないのである。

次に第二の理由としては、氏の選択した思想史の位相に係わる問題が挙げられよう。

これは第一の理由とも密接な係わりを持ち、先の例では荀子や韓非を「理念的」として否定的に見る立場に示されるもので、さらに次のような説明も行われている。

「つまり荀子の政治論は、まさに政治の理念を説くことを核とするのであって、その意味で普遍性を持つが、具体的な政治の行政部門にまで掘り下げて関わろうとするものではない。」(三〇頁)

「韓非に経済説がないとはよく言われることであり、(中略)韓の土地そのものが拡大する要素を欠いていた。たしかにそうした事情もあろうが、実は土地の開発や経済の生産性の向上を前提とすれば、韓非の全体的な論理体系は崩壊する。」(三五頁)

では、氏が優位性を主張される『管子』『呂氏春秋』は、「具体的な政治の行政部門にまで掘り下げて関わろうと」しているのであろうか。

恐らく氏の脳裏をかすめたものは『管子』の経済説であったに違いない。「第三章 『塩鉄論』の世界」にはそれを裏づける記述も見える。

「いったい『管子』の書は、口を極めて軽重政策の重要性、つまり富国への道はたんなる強本節用、勤倹力行では駄目で、より高い次元からの経済政策をもって天下を経営すべきだと説く。その根拠となるものに統計調査があり、その資料が頻出する。この点こそ同じく富国強兵を目標として議論を組立てた『韓非子』の原則論抽象論との違いであり、またそこにきわめて実証的実務家的な精神も看取されるわけである。」(一九四頁)

だがしかし、この「第一章　統一への序章」では、『管子』の優位性を主張されるに当たって氏はそれに触れようとはしない。その理由は『呂氏春秋』との統一的理解の難しさ、及び、次代の思想との接続への配慮にあったと推定される。

かくして『管子』の政治論が持つ具体性は、『呂氏春秋』の時令思想とも係わりを持ちそうな「呪術宗教的部分まで見通した」ところに求められることになる。

「経言七篇は（中略）現実の国家社会に有効にして役立つであろう諸思想制度の総集なのである。たとえば牧民篇の冒頭の国頌と題される一章で（中略）山川鬼神の諸々の神々をも網羅する民衆の信仰心をも包み込まねばならぬと説く。これは『管子』の書が、（中略）呪術宗教的な部分にまで関心を拡げこれを自らのうちに押さえこもうとする姿勢をもつものであることを示している。そして呪術宗教的な部分まで見通したところで政治が成立すると説くのは、『荀子』や『韓非子』がただ否定的にしか見ることのなかった巫祝禨祥の世界の政治的再生とでもいうべきもので、この期の現実に照らして大いに注目すべき視点であるといわなければならない。」(四〇頁)

『荀子』や『韓非子』が「ただ否定的にしか見」なかったかどうかはひとまずおくとして、このような呪術宗教的要素が氏の言われる「具体的な政治の行政部門にまで掘り下げて関わろうと」する思想に該当しないことは自明であろう。

本書を一読して気のつくことは、「制度」「文化」という言葉が頻出するわりには「制度」「文化」への論及が希薄だという点である。町田氏が金谷氏の限定した思想史学という領域に満足せず、より広い視野に立った思想史の構築を意図したことは先に述べた通りである。しかしながら、結果的に金谷氏の定めた領域内に留まるものとなってしまったことは、氏の用いる「文化」という言葉に象徴的に示されている。

「たまたま哀帝期における歆の主張は敗れはしたが、こ

れがその後の思想界にただならぬ波紋を生じる一石を投じたものであることはいうまでもない。そしてそれはたんに今古文という学術史的な分野を超えた文化運動的側面をも同時に担うものでもあった。[17]」(二六四頁)

〔原注(17)この時代の通弊として指摘されるものに信念の欠如というべきものがある。古文の文化運動的側面とは、主としてこれをカバーすることの意味で用いる。(後略)〕

「礼楽五経はいわば聖人の属性だということである。それは「文化」ということばに置き換えうるものでもある。」(三四〇頁)

一体、我々が目にすることのできる先秦から漢初の時期にかけての文献は、若干の発掘資料を除けばいわゆる思想の書である。経済説を唱える『管子』とてその例外ではなく、あくまでも思想のレベルで経済政策の重要性を説くにすぎない。町田氏も引用される『韓非子』五蠹篇の「今境内の民皆な治を言い、商管の法を蔵する者は家ごとに之れ有り。而るに国愈々貧しきは耕を言う者衆くして、耒を執る者寡なければなり」という言葉は、そのことを端的に示していよう。従って町田氏の、『荀子』『韓非子』と『呂氏春秋』『管子』との間に理念と現実といった位相差を見出そうという試みには、もともとの所で無理があったように思われるのである。

ここで少しく巨視的な立場から思想と制度との関係を考察してみよう。

周知のように漢王朝の制度に関しては、『漢書』の百官公卿表等の記述を前提として秦の諸制度をほとんどそのままに踏襲したと言われている。しかし、その採用した政治的イデオロギーは秦の法家から漢初の黄老へ、さらに儒家へと目紛るしい変化を見せる。王朝の採用するイデオロギーという、現実に施行された制度と最も多くの接点を有する筈の思想でさえ、このように現実の推移と必ずしも一致するものではない。とすれば、その他の思想の場合には、現実社会の進行と何らの脈絡すら見出せないような独自の展開を遂げることも、可能性としてはあり得よう。もちろん、思想と現実との間にも相互に親になり子になるといった、いわば臍の緒のような紐帯は存在する。とは言え、親子がそれぞれ個体としての歴史を保持するのと同じ程度の意味で思想と現実とは独自の歴史を持つのであり、そこに、思想史、制度史といったひとまずは個別の歴史が成立する余地があるのである。

かつて金谷氏が些か曖昧な言い方ながら「哲学史学と精

神史学との中間領域を占めるもの」と定義した思想史学を、以上のような考えに基づくものであったと理解するならば、制度史や社会経済史的なものに今一歩の所で踏み込もうとしない消極性の裏には、批判するものの心をひやりとさせる思想に対する透徹した洞察が隠されていたことに気づく。

しかしながら、この一歩はいずれ誰かが踏み出さなければならない性質のものであり、その意味で町田氏の挑戦は確かに称賛に値するものである。にも拘らず、氏が結果的に思想史学の領域に踏み留まってしまったこと、及び、「第二章　統一の思想」における「雲夢秦簡」を資料とした論証が氏の思想史と積極的な係わりを見出せずにいること、また「第三章　『塩鉄論』の世界」における「中者」をめぐる議論が儒教イデオロギーの滲透という思想史の側のストーリーと矛盾する結論を導いているのを眼前にする時、それがいかに困難な道であるかを改めて認識させられたというのが、本書を通読した評者の偽らざる感想であった。

さて、以上で方法論を中心とした総論を終えることとしたいが、紙幅の都合上、町田氏の叙述に即した章節ごとの各論は行わず、本書の全体構造の紹介を兼ね、目次に即して総論では触れ得なかった若干の疑問点を列記しつつ、本評を締め括ることとしたい。

〔目次と寸評〕

序　秦漢思想史への視角
第一章　統一への序章
一　戦国末の思想界について㈠
—「荀子」と「韓非子」
二　戦国末の思想界について㈡
—「管子」と「呂氏春秋」
第二章　統一の思想
一　雲夢秦漢ノート㈠
二　雲夢秦漢ノート㈡
三　秦の始皇帝について

〔始皇帝の場合、政治的実績だけが「皇帝」の証明だったのかどうか、始皇帝と呪術との関連を考える時、疑問が残った。〕

四　李斯について
五　漢初の思想界について
六　儒教国教化について

〔氏は消去法によって儒家であらねばならなかったことを証明するが、道家を政治否定、法家を合理主義という点でのみ捉えることはでき

ないのではなかろうか。

第三章　『塩鉄論』の世界

一　散不足篇について

二　散不足篇の「中者」について

第四章　前漢中末期の思想

本章については、既に沢田多喜男氏によって「読蕭望之伝余録―前漢武帝期三経博士等考―」（千葉大学人文研究　15　一九八六年三月）という批判が発表されている。事実認定等に関する碩学の歯に衣着せぬ論評は、学問の厳しさと哀しさとを教えているようである。参照されたい。

一　宣帝期の儒教

二　楊惲の死

三　哀帝期のこと

四　劉向論

劉向が劉氏のイデオローグであったとすると、何故宗廟郊祀の改革に反対するのか。「経典主義的立場から儒教の政治化絶対化の行きすぎにブレーキをかけた」（三〇一頁）との説明は説得力に欠けるように思える。この点、板野長八氏『中国古代における人間観の展開』第二十章　前漢末に於ける宗廟・郊祀の改革運動（岩波書店）との争点を明確にして頂きたかった。

五　揚雄について㈠

本田済氏『易学―成立と展開―』（サーラ叢書）の易学の展開として位置づけられた『太玄経』との差異を明確に示して頂きたかった。

六　揚雄について㈡

第五章　道家の思想

一　管子四篇について

いわゆる「管子四篇」と『韓非子』喩老篇とを一括りの派に入れるのには無理がある。何故なら氏が根拠の一つとされる『老子』二十六章はそのままの形で馬王堆本にも存在し、従って『老子』の思想は当初より政術と深い係わりを持っていたと考えられ、「管子四篇」を道家思想の法家化したものとは断定できなくなるからである。このことはまた、氏の言われる「本来の道家思想」（三六七頁）と法家思想との差異が政術の有無には求められないこと

をも意味していよう。

さらに、道徳と仁義との関連も、当初からそれ程対立的ではなかったことが最近の発掘資料によって確認されつつある。従って、道徳と仁義礼楽との円満な関係を根拠として心術上篇の経文の成立時期を引き下げることには問題があるのではなかろうか。

二　道家思想について

あとがき

索　引

（昭和六〇年一月二五日発行、創文社、A5版、本文並索引　四三〇頁、七〇〇〇円）

附　記

本評が学恩を受けた金谷治、町田三郎両先生に対し極めて礼を失した内容のものであること、及び、「違う」とは言えても「こうだ」とは言えない浅学菲才の我が身を思う時、内心忸怩たる思いを禁じ得ない。しかし、それがいかに結果として誤謬に充ちたものに終わろうとも、今の私にはこう見える、こう思えるという真実を書き連ねてみたいという衝動に駆られて本評を綴った。書評は評者の力量をも如実に示すという。大方の叱正を乞う次第である。

尚、本書については「創文」257号（一九八五年　七月）に池田秀三氏の書評が、また、「中国哲学論集　11」（九州大学　中国哲学研究会　一九八五年　一〇月）に有馬卓也氏の書評が掲載されている。参照されたい。